

魔王の勇者

く諸侯十二人の前で四つんばい、剣を握ったまま最奥まで犯される九日間く

デビューへ

R18

体
験
版

目次

第1話 剣はそこだ 3

第2話 殺しに来たんだろう

第
1
話

剣
は
そ
こ
だ

刃が入った。

魔王の腹の、左。

手応えは、革を裂いたときと同じだった。

「ザガン」

名前を呼んだ。

討つ相手の名前くらい、調べてから来る。

それが礼儀だと、俺は教わった。

返事はない。

金色の目が、俺の顔を見ている。

痛がってもいない。

そこで、俺の腕が止まった。

止めたのは俺だ。

心臓を狙っていた切先が、腹の左へ逸れた。
なぜ逸れたのか、俺には分からない。

「——それだけか」

「どけよ」

「腹に刃を入れておいて、その言い草か」

「重い」

「そうか」

魔王の手が、俺の手首を掴んでいる。

熱い手だ。

指の一本一本が、骨の間に食い込んでくる。

玉座の間の床は、思ったより冷たかった。

背中から落ちて、そう思った。

魔王の膝が俺の腹に乗って、肺の空気が全部出る。

「その手だ」

「……なんだよ」

「柄を握ったままの男を、俺は久しぶりに見た」

「気色悪い」

「褒めている」

「何が目的だ、あんた」

答えはなかった。

剣は離さなかった。

それだけは離さなかった。

「エルド！」

テオの声だ。

振り向けない。

「エルドっ、まだ祈りが——」

「唱えるな」

「でも」

「祈りの声は、まっさきに口を狙われる」

「エルド」

「テオ」

「……はい」

魔族の兵が四人がかりで、僧衣の男を引きずっていく。

引きずられていく背丈は、俺とほとんど変わらない。

薄い肩の上で、首から提げた木の輪が跳ねている。

黒髪を耳の後ろで結んだ男が、最後まで俺の目を見ていた。

祈りの文句を、途中で忘れた顔だ。

その隣で、俺より頭半分高い、首の太い男が壁に押し付けられている。

「おい、離せ！」

「ガイ」

「隊長が下にいるだろうが！」

壁に押し付けられた首が、それでも段のほうへ伸びる。

「動くな。お前が動くと、あの膝がもう一度落ちる」

「っ、くそ、くそっ」

「……で、いつ帰る」

こんなときにも、その言い方だ。

左耳の潰れた男が、押さえられたまま俺を睨んでいる。

「知るか」

「そのへらず口が、いつか喉に刺さるぞ」

「フェン」

俺より低い痩せた男は、暴れもしない。

「なんです」

「そいつを黙らせろ」

「無理です」

「なんでだ」

「隊長、言わなくていいです」

「何がだ」

「兵の手つきを見ました。あれは首を落とす持ち方じゃない」

「……」

「殺す気がないんですよ、あの王は」

「だったら」

「だったら、そのほうが悪い」

指に墨をつけたまま、フェンは目を伏せた。

それきり、何も言わなかった。

生かされているのは、たぶん、いいことではない。

十二人。

玉座の間の段の下に、魔族の諸侯が並んでいる。

ある者は杯を持ったまま、ある者は膝を立てて身を乗り出し、いちばん奥にいた一人は椅子から滑り落ちて、そのまま床に座り込んでいた。

腰が抜けたのだ。

人間の勇者が魔王の腹に刃を入れる。

百年、誰も見たことのない絵だ。

「王よ」

角の短い男が前へ出た。

王より頭ひとつ低い。

根元を金の輪で締めた角。

指輪を人差し指まで嵌めた手。

その男は喋る前に、一度、王の腹を見る。

「王よ、その傷は。人間の刃が王の腹に届いたなどと諸侯の館に知れば、北も西も南も、明日から我らの言うことを聞きませぬ。塞いでいただかねば示しが」

「見るな」

「王よ、私は王のために申し上げて」

「見るなと言った」

ネイド侯は口を閉じた。

閉じたが、目はまだ腹を見ている。

「王よ、では、せめてその人間は」

「殺さん」

「……は」

「聞こえただろう」

「お言葉ですが、生かして何になりますか。首を落とすのが我らの習いですぞ」

「城の見せ物だ」

「王よ、見せ物などと。我らは百年、人間の首を落として参りました。落とさぬ首を城に置けば、北の館も西の館も、王は人間に情が湧いたのだと申しましょう。私は王のために」

「三度目だ、ネイド」

「……王よ」

そう言ったきり、その男は黙った。

俺の上から重みが消える。

起きようとしたら、髪を掴まれて顔を上げさせられた。

金色の目が、上から降りてくる。

近すぎて、俺の緑が金の中に映っている。

「殺しに来たんだろう」

「……」

「殺しに来て、外したな」

「切先は、あんたの中で止まった」

魔王の親指が、俺の顎を持ち上げる。

「腹の左だ。心臓は、そこにはない」

「知るか」

赤茶の髪を掴む手が、少し緩んだ。

魔王は俺の手を見ている。

剣を握ったままの、右手を。

「離せと言えば離すか」

「……」

「黙るのか」

「口に出したら、あんたの思う壺だろ」

「面倒な男だ」

魔王が笑った。

笑い方が、人間とほとんど同じだ。

そこが一番、気持ち悪い。

「三人は、三つの館へ預ける」

「――待て」

「北のネイドの館に一人。西に一人。南に一人」

「聞けよ、こっちの話を」

「お前が俺を殺せば、その日のうちに三人とも死ぬ」

「そんな話は聞いてない」

「今した」

喉が鳴った。

自分の喉だ。

「返せ」

「柄が汗で滑っているぞ」

「返せ」

「……頼む、の一言をまだ聞いていない」

言わない。

言えば、この男のものになる。

それくらいは分かる。

「返せ」

「言い方を変えないな、お前は」

「喉が潰れるまで付き合ってやる」

「好きにしろ。何も変わらん」

魔王が立ち上がった。

肩が広い。

黒い角が二本、後ろへ倒れている。

俺より頭ひとつ高いその体の、腹の左に、俺が付けた傷がまだ開いている。

血は止まっている。

塞がってはいない。

「その傷、塞がないのか」

「刃の跡は残す」

「なんでだ」

「お前には関係ない」

「じゃあ最初から黙ってろよ」

「訊いたのはお前だ」

「剣はそこだ」

魔王が、俺の右手を顎で示す。

剣だこの上に、まだ柄が食い込んでいる。

「使え」

「……」

「なぜ握ったまま動かん」

「手を開いた瞬間に、三人の首が落ちる」

「賢いな」

「振らないなら、そのまま持っている」

——剣は、そこにある。

「死にたければ死ね。俺は止めない」

それが、この男が俺に選ばせた最初で最後の問いだった。

以後、この男は俺に一度も選ばせなかった。

「湯をお持ちしました」

段の下から、乾いた声がする。

角が一本折れた老魔族が、両手を前で組んで立っている。

段の下に立った背は、俺が立てば肩までしかない。

顔は上げていない。

「ヨナ。あとでいい」

「湯は冷めますが」

「湯気は要らん」

「では、置いておきます」

「先に、諸侯へ見せる」

「以上ですか」

「以上だ」

何を見せる、と訊く前に、床に押し倒された。

◇

鎧の留め具が、上から順に外されていく。

魔王の手は大きい。

指の腹が熱い。

首の後ろの古い火傷の跡を、その指が一度だけなぞった。

「自分で脱ぐか」

「留め具は、あんたの指の下だ」

「なら剥ぐ」

胸当てが落ちる。

ガシャン。

その音で、諸侯の誰かが息を呑んだのが分かる。

籠手が外れる。

草摺が外れる。

脛当てが外れる。

腰の物入れから、干し肉の包みが転がり出た。

三日ぶん持ってきた、人間の携行食だ。

「三日で終わらせるおつもりでしたか。ずいぶんと安く見られたものですな、我らの城

も」

「黙れ」

魔王が言う。

顔は、一緒に笑った諸侯のほうへ向いている。

「脱げ」

「手が塞がってる」

「片手でいい」

「……」

下衣を引き下ろされる。

尻が床に触れて、その冷たさで背中が跳ねた。

「玉座の段へ上がれ」

「……なんで」

「下からのほうが、よく見える」

「十二人の目が、揃ってこっちを向くんだぞ」

「集めたのは俺だ」

「……あんた、頭がおかしいんじゃないのか」

「百年、誰にもそう言われなかった」

腰を掴まれて、段の上に膝をつかされる。

四つん這い。

顔を上げると、正面に玉座の脚がある。

振り向けば、十二人。

振り向かない。

「脚を開け」

「嫌だ」

「断るのは俺の役だ」

膝の内側に手を入れられて、勝手に開かされる。

太腿は厚いほうだ。

兵として十年やってきた脚が、魔族の片手で割られた。

「厚いな、ここは」

「触るな」

「もう指の腹が覚えている」

「ちがう」

「今日から俺のものだ」

「……その手、いつか縛らせてもらう」

「覚えておこう」

尻を掴まれて、割られる。

外の空気が、そこに当たる。

当たっただけで、腰が震えた。

「濡らすものが要る」

「余計な世話だ」

「お前が乾いていても、俺は困らん。困るのはお前だ」

「……勝手にしろ」

「そのつもりだ」

ヨナが段を一段だけ上って、壺を差し出す。

灰色の髪を襟足で切り揃えた頭は、上がらない。

魔王がその中身を掬う。

油だ。

少し温い。

それが尻の割れ目に垂らされて、ゆっくり下りていく。

「冷た、」

「すぐ温まる」

ヌプ。

指が入った。

「ッ、」

声を殺した。

殺しきれない部分が、鼻から抜ける。

「狭いな」

「あたりまえ、だろ」

「痛いかな」

「……喉が渴いただけだ」

「正直でいい」

指の付け根まで入って、そこで止まる。

入り口が、指を締めたまま震えている。

「うるさい」

「もう一本入れる」

「口に出すな」

「聞かせるためにやっている」

「……っ」

指が増えた。

ヌチュ。

油の音がする。

自分の体の中から音が出るのを、初めて聞いた。

「ア、」

出た。

出てしまった。

段の下で、誰かが身じろぎする気配がする。

「聞こえたぞ」

「……石が鳴っただけだ」

「無理だ。ここは俺の城だ。床の癖は全部知っている」

「耳を、塞げ」

「詰めるのはお前の口だ。指を突っ込んでやろうか」

「いい」

「ならもう一度出せ」

「……っ、む、り」

「出る」

空いているほうの手が、俺の胸の下へ回る。

乳首を、爪の先で弾かれた。

「ひ、ッ」

「ここも赤いな」

「触る、な」

「鎧で擦れていたんだろう。十年も着ていれば」

「関係、ない」

「あるだろう」

指の腹で潰される。

潰されて、爪の先が同じところへ来る。

そのたびに、中に入っている指を勝手に締めてしまう。

「締まった」

「ちが、っ」

「胸で締まる男は、初めて見た」

「ア、ッ、あ」

「もっと弾くか」

「そこ、は」

「ここもだ、と言え」

「舌が、動か、ない」

中の指が、上を向いた。

腹側の、浅いところ。

そこを腹の内側から押されて、俺の腕が崩れる。

肘が段について、頬が石に着いた。

「ここか」

「ちが」

「ここだな」

グリユ。

「ンあ、ッ、あ、あ」

「当たりだ」

「ちが、っ、ア」

腰が、勝手に逃げる。

逃げたぶんだけ追ってきて、指の腹が腹の内側を押し上げる。

グチュ、グチュ、と鳴る。

鳴るたびに、腹の奥がひとりでに縮む。

「もう一回だ」

「ま、って」

「待たない」

前が濡れている。

触られてもいないのに、先から垂れている。

我慢汁が、玉座の段の石に落ちて糸を引いた。

「見ろ」

魔王が言う。

俺にではない。

「見ろ。人間の英雄が、俺の指で漏らしてる」

段の下が、静かになった。

静かになったのが、いちばんきつい。

背中に、十二人の目が刺さっている。

「やめ」

「聞こえない」

「……やめろ」

「喉の音が、逆を言っている」

石の上で、膝が滑った。

「うるさ、ア、ッ」

「もう一本増やす」

「むり」

「入る」

「入らな、ア、ッ、あ、あ」

「入った」

「ひ、ろ、げるな」

「広げる。ここに入れるちんぽが、指より太い」

広げられて、内側の襷が引っ張られる。

グチュ、ヌチュ、と鳴る。

鳴るたびに、諸侯の誰かが唾を飲む。

「腹の中がもう温い。俺の指の形が分かるか」

「太、い」

「言え。中がどうなっている」

「……っ」

「言え」

「……知るか」

「まだ死んでない、と言ってみろ」

「……まだ、心臓は動いてる」

言ってしまった。

自分でも、なんでそれを言ったのか分からない。

「知っている」

「なら訊くな」

「死んでいる男は、こんなに締めない」

三本が、揃って中で曲がる。

グチュン。

「アッ、あ、あ、そこ、まだ、」

「まだ、なんだ」

「まだ、押す、な」

「押す」

グリユ、グリユ、と続けて押される。

腹の内側が波打って、前からまた垂れた。

垂れたぶんが石の上の溜まりに落ちて、糸が二本になる。

「濡れているのは油か、お前か」

「あぶ、ら」

「油はここまで垂れん」

「ちが、う」

「違わない」

指が奥へ伸びる。

届いていないところが、まだある。

それが分かってしまった。

「足りないな」

「もう、いっぱい」

「まだ半分だ」

「うそ、だ」

「腰が下りていない。まだ入る」

指が抜ける。

ズルッ。

抜けたあとの穴が、閉じきらないのが自分で分かる。

開いたままだ。

穴の縁に、熱いちんぽの先が押し当てられた。

指より、ずっと太い。

先が濡れていて、縁に引っかかる。

「ちんぽだ」

「知って、る」

「触られなくても分かったか」

「……縁に、当たって、る」

「太いだろう」

「……黙れ」

当てられているだけで、腹の底が勝手に鳴る。

「入れる」

「まだ、待——」

待たなかった。

ズン。

「ンあ、あああッ」

入ってきた。

一気に、奥まで。

腹の中の、いちばん奥。

人間相手には一度も届いたことのない場所に、初日で届いた。

「アッ、あ、そこ、」

「奥だ」

「奥、来て、る」

「そうだ。ここが人間の英雄の最奥だ」

「言う、な」

「言う。全員に聞かせる」

段の下の息が、いっせいに止まる。

「アッ、ア、動く、な」

「動く」

「まだ、慣れて、な」

「慣れるまで待つ男に見えるか」

「……そんな、顔じゃ、ない」

「そうだ」

魔王が動き出す。

最初から、加減がない。

ズン、ズン、と、腹の底に杭を打たれている。

そのたびに玉座の脚が視界の中で揺れた。

「ア、ア、アッ」

声が出る。

出るのを止められない。

段の下の十二人に、全部聞こえている。

剣を握ったままの右手が、石を掻いた。

爪が割れる。

それでも離さない。

「離さんな、それは」

「爪が、割れ、ても」

「勇者だからか」

「そう、だ」

「ならもつと鳴け。人間の英雄の声だ。諸侯に聞かせてやれ」

「だれ、が、っ」

「鳴いている」

ズン。

「アッ」

「ほら鳴いた」

魔王が段の下へ顎を向ける。

「見ろ。人間の英雄が、俺のちんぽで鳴いてる」

「ちが、う」

「今のはどこで鳴いた。口か、腹か」

「知る、か、ア、アッ」

段の下で、杯が倒れる音がした。

拾う者はいない。

誰も、拾いに動けなかったのだと思う。

「聞け」

魔王が諸侯に言う。

「人間の国が百年かけて育てた英雄の声だ。二度と聞けん」

「やめ、ろ、そいつら、追い出せ」

「もう聞かせた」

「王よ」

段の下から、ネイド侯の声がした。

「王よ、そこまですらさらずとも」

「見ていろ」

「私は」

「ネイド。目を逸らすな。人間の英雄が、俺の下でどうなるかを最後まで見ろ」
腰を掴み直される。

親指が腰骨に食い込む。

「腰骨、碎ける」

「魔族の指は、そこまで細くない」

角度が変わって、さっき指で押された場所を、太いちんぽが擦って通った。

「ヒッ、あ、あ、そこ、そこは」

「ここだな」

「ちが、う、っ、ア、アアッ」

違わなかった。

擦られるたびに、前から垂れる量が増えていく。

触られていない。

一度も触られていないのに、俺のちんぽは石の上に糸を垂らし続けている。

ズチュ。

ズチュ、ズチュ。

油が泡になって、繋ぎ目で鳴っている。

掻き出されたぶんが、太腿まで垂れてくる。

「あぶ、ら、が、膝まで」

「油は途中で乾く。膝の裏まで行ったのは、お前の穴の奥から出たぶんだ」

なんで俺は、腰を上げているんだろうか。

上げれば深く入るだけなのに。

「上げたな」

「ちが、」

「上げた。腰が俺を迎えに来ている」

「そんな、こと」

「あるんだ、これが」

「ないっ、ア、」

グリユン。

最奥を捏ねられる。

「あ、あ、アアア——」

いった。

擦られて、押されて、奥を捏ねられて、いった。

精液が石の上に飛んで、俺の腹の下で白く伸びる。

「見ろ」

魔王の声が、俺の頭越しに段の下へ飛んだ。

「人間の英雄が、俺のちんぽでいった」

髪を掴まれて、顔を段の下へ向けさせられる。

段の下の顔が、全部こっちを向いている。

誰かが椅子を鳴らした。

ネイド侯だけが、動かない。

動かずに、王の腹の傷を見ている。

「王よ」

「なんだ」

「……いえ」

初めて、その男が言葉を切った。

いったばかりの中を、まだ突かれている。

「ま、って、いま、いった、から」

「知っている」

「アッ、あ、あ、無理、」

「無理じゃない」

「無理だ、っ、て」

「まだ足りん」

中がひくついているのが、腹の内側で分かる。

締めるつもりはないのに、勝手に締まる。

締まったところを無理やり割って、ちんぽが奥まで入ってくる。

ズン。

ズン。

腹の中の形が、この男の形に変えられていく。

「ここを、俺の形で覚えろ」

「や、だ」

「覚える。腹のほうが先に覚える」

ズン。

ズチュ、ズチュ。

「ア、あ、あ、待、って」

「待たん」

「いま、いま、擦れ、て」

「どこがだ」

「……奥」

「言えたな」

「ちが、言わされ、た」

「言ったのはお前の口だ」

「ちが、う」

「違わない」

奥だけを、短く突かれ始める。

抜かずに、先だけで捏ねられる。

逃げ場がない。

逃げようとして石を搔いた指が、また滑った。

「アッ、ア、そこ、ばっか、」

「ここばかりだ」

「ヒ、ッ、あ、あ、あ」

「腹の中で締めているのが分かるか。俺の形にもう合っている」

「合って、な、い」

「合っている」

「アッ、ひ、ぐ、っ」

石に押しつけた頬が、擦れて熱い。

「声が変わったな」

「うるさ、っ」

「奥に入るたびに、高くなる」

「言う、なっ、ア、アッ」

「アッ、ア、また、来る、」

「来い」

「や、っ、また、」

「来い」

魔王の掌が、俺の腹の下から胸へ滑る。

「イ、く、また、イく」

「イけ。腹の奥で出せ」

「アアッ、ア、ア——」

ビュク。

二度目が来た。

さっきより短くて、深い。

腹の奥だけで達したような、逃げ場のない出方だった。

石の上に落ちる精液は、もうほとんど残っていない。

それでも、体は震え続けている。

「二度出したな」

「言う、な」

「石の上を見れば、段の下の全員に分かる」

「じゃあ、目を閉じろ」

「断る」

「……あんだ、ほんとに」

「ほんとに、なんだ」

「……なんでもない」

奥を突いたまま、腰が止まった。

止まったぶん、中がその形をはっきり拾う。

「人間の英雄」

「な、んだ」

「出すぞ」

「——待」

待たなかった。

最奥で、精液が弾ける。

ドク。

ドク、ドク。

腹の内側が、じわりと重くなっていく。

「ア……あ、あ」

入ってくる。

まだ入ってくる。

「多、い、っ」

「そうだな」

「まだ、出て、る」

「出ている」

魔王の腰が、俺の尻に押しつけられたまま止まらない。

「アッ、あ、あ」

「ちんぽ、が、まだ、膨らんで、る」

「奥に全部出すまで抜かん」

ドブン。

腹の底が、この男でいっぱいになった。

奥に溜まって、行き場がなくなって、繋ぎ目から押し出される。

「腹、が、重、い」

「奥に溜まったぶんだ。逃げ場が無くなれば、繋ぎ目から溢れる」

ドブ。

太腿の内側を、精液が下りていく。

下りきって、膝の裏で止まった。

腹が重い。

飯を食ったあとより、はっきり重い。

「腹が張っているな」

「言う、な」

「押すと分かる。ほら」

「ア、ツ、押す、な」

「まだ出てくるぞ」

「腹、が、溢れ、る」

太腿の内側を、また一筋下りていく。

「もう出した」

「明日も入れる。慣れる」

「体が、先に、壊れ、る」

「腹はもう覚えた。あとは口だけだ」

「くそ、が」

「そう言う男ほど、早い」

俺は段に頬をつけたまま、それを最後まで受けた。

受けながら、右手だけは動かなかった。

剣は、まだ手の中にある。



「湯を」

「お持ちしました」

湯気は、もう立っていない。

「冷めたか」

「指が入ります」

「かけろ」

「勇者殿にも、でしょうか」

「先に勇者だ」

ヨナが段を上ってくる。

顔は上げない。

魔王のちんぽが抜けて、中から精液が太腿を伝う。

濡れて光っているそれを、段の下全員が見ている。

見ていた諸侯の一人が、席を立てて出ていった。

ネイド侯は、まだそこにいる。

「王よ」

「なんだ」

「餌に情を移されるな」

「……」

「王よ、お聞きに」

「耳はある」

魔王は答えなかった。

答えずに、俺の右手を見る。

剣を握って、白くなっている手を。

「離せ」

「嫌だ」

「離せと言った」

「……あんたが、そこだと言った」

魔王の指が止まる。

止まって、それから、俺の手をそのままにした。

「そうだったな」

「柄の跡が、まだ手に残ってる」

「言質を取るのが上手いな、勇者は」

「……あんたの舌のほうが、よく回る」

何がおかしいのか、笑っていた。

「ネイド」

「はっ」

「お前の館の一人を、殺すな」

「……は」

「殺せば、俺がお前を殺す」

「王よ、それは」

「殺すと言った」

ネイド侯は、そこで初めて、王の腹から目を離した。

寢室へは、歩いて行かされた。

歩けなかったので、途中から抱えられた。

それも見られていた。

魔族の兵にも、廊下の隅の魔物にも、たぶん全員に。

「歩ける」

「膝が笑ってる」

「……」

「腹の中のものが、まだ落ちきっていない。それだけだ」

「降ろせよ」

「うるさい男だ」

魔王の腕は、腹の傷のすぐ上で俺を抱えている。

血の匂いがした。

俺が付けた傷の匂いだ。

「門は開いている」

「……は」

「出ていきたければ出ていけ。三人はここに残るがな」

「卑怯だな」

「そうだ」

出ていかなかった。

出ていけるわけがない。

寝台に落とされて、天井を見た。

魔王城の天井は、高い。

高すぎて、どこが終わりか分からない。

「明日も呼ぶ」

「行かない」

「来る」

「行かない」

「来る。——エルド」

名前を呼ばれた。

初めてだ。

玉座の間では、一度も呼ばれなかった。

諸侯の前の俺は、人間の英雄だ。

「……その名前は、仲間しか使わない」

「呼ぶ」

「二人のときだけかよ」

「そうだ」

扉が閉まった。

俺は負けた。

腹の中は、まだ熱い。

それでも、右手は開かなかった。

剣は、枕元に置かれていた。

刃は、俺の側を向いていた。

第2話

殺しに来たんだろう

二晩目の寝室。

「起きているんだろう」

背中を向けたまま、魔王が言った。

「寝ろ」

黒い角が二本、枕の上で後ろへ倒れている。

その広い背中、手の届くところに、俺の剣が置いてある。

刃は、俺の側を向いている。

落とせば、たぶん届く。

届くのに、俺は動かない。

「寝ている男に、剣は取れんぞ」

「……」

「今、手が動いた」

「指が滑っただけだ」

「柄が鞘に擦れる音がした」

聞かれていた。

俺は手を、腹の上に戻した。

掌が汗で湿っている。

「気色悪い」

「背中に耳でもついてるのか」

「お前の息が変わった。それだけだ」

「寝苦しいだけだ」

「剣を取る前の息だった」

「……黙れ」

魔王は、まだこっちを向かない。

向かないまま、片手を後ろへ伸ばして、俺の手首を掴んだ。
昨日と同じ、熱い手だ。

「離せ」

「手首の下で、指がもう柄を探している」

「……あんたの手のほうが熱い」

「なら握っている。俺の手を」

「そういう意味じゃない」

「分かっている」

分かっているって言ったのだ、この男は。

俺は、掴まれた手をそのままにした。

麻の上衣を着せられていた。

魔族の兵が着る、粗くて安い布だ。

自分の鎧は、どこにもない。

「これ、誰の」

「城のだ。お前の鎧は溶かした」

「……鉄をか」

「兜も、胸当ても。剣だけ残した」

「なんだ」

「剣を握る男が、剣を取り上げられて泣くのは見飽きた。取れる場所に置いておくほうが面白い」

「趣味が悪い」

「知っている」

粗い布が、肩で擦れて痒い。

「返せよ、鎧」

「溶かしたと言った」

「じゃあ、これを超越せ。裸で寝ろってのか」

「着ているだろう、もう」

「安物だ」

「安物で十分だ。すぐ脱がす」

起き上がろうとしたら、腹の奥がまだ重かった。

昨日のが、まだ残っている。

座り直ただけで、繋ぎ目のあたりがぬるりと動いた。

「動く出るぞ」

「言うな」

「出したのは俺だがな」

「だから言うな、って」

扉の外で、乾いた咳がひとつ聞こえた。

「湯をお持ちしました」

「入れ」

角が一本折れた老魔族が、両手で盆を持って入ってくる。

俺より頭半分ぶん低い背が、盆の重みで少し前に傾いている。

灰色の髪を襟足で切り揃えた頭は、今日も上がらない。

盆には湯桶と、それから杯がひとつ。

「葡萄酒も、とのことでしたので」

「誰が言った」

「王が、昨夜」

「覚えていないな」

「では、私の聞き違いです」

ヨナは杯を枕元へ置いた。

剣のすぐ横だ。

剣を見ても、何も言わない。

「勇者殿。湯を、おかけしても」

「……自分でやる」

「では、桶を置いておきます」

「ヨナ」

魔王が呼んだ。

「なんでしょう」

「昨日、廊下でこいつを運んだとき、誰が見ていた」

「兵が二人。それから、私が扉を開けました」

「見たか」

「扉を開けただけです」

「見たかと訊いている」

「……以上です」

ヨナは、それだけ言って下がった。

下がる前に、もう一度、乾いた咳をした。

何を知らせているのか、たぶん本人にも分からない咳だ。

杯を取って、葡萄酒を舐めた。

甘くて、薄い。

人間の国の酒と、味が違う。

「三人は、無事なんだろうな」

「生きている」

「それとこれとは、別だろ」

「生きている、と答えた」

「同じじゃない」

「同じにしたいなら、そう思え」

敷布の上で、指が一本ずつ丸まった。

「テオは。僧衣の、あいつは」

「北の館だ。祈っているだろうよ、お前のために」

「口を閉じてろ、と伝えろ」

「自分で言え。会わせはせんが」

「ガイとフェンは」

「西と南だ」

「どっちがどっちだ」

「教えん」

杯の中で、葡萄酒が揺れた。

「なら、生きてる声だけ聞かせろ」

「城の外へは、何も出さん」

「けちだな、あんた」

拳が、震える。

「返せ」

「今日も同じことを言うんだな」

杯の縁を、指でなぞった。

「いつ、返す」

「そのうちだ」

「そのうちっていつだ」

「決めていない」

「口が重いだけか」

「好きに取れ」

言わないんだ、この男は。

返す気があるのかないのか、顔に出さない。

「あいつ、何を見たんだ」

「訊いてどうする」

「あの爺に知られたのが、気に入らない」

「昨日は諸侯十二人に見せたぞ」

「あれは、晒し者にされただけだ」

「爺の目だけが、別か」

言葉に詰まった。

諸侯には見せられた。

ヨナには、見られた。

その差が、俺の中にある。

「……分かん」

「正直でいい」

耳の後ろが、熱くなる。

「その言い方、やめろ」

「昨日も同じ顔をした」

「反吐が出るくらい、うんざりだ」

「好きな言い方を教えろ。使ってやる」

「ない」

「なら諦めろ」

「あんたに指図される筋合いはない」

「筋合いは、昨日俺が作った」

魔王が、初めてこっちを向いた。

金色の目が、近い。

腹の左の傷が、俺の脇腹に触れる。

まだ塞がっていない。

血は止まっているのに、縁が開いたままだ。

「その傷、痛むのか」

「血はもう出ていない」

「嘘だ。今、俺が触ったら息が止まった」

「……」

硬い腹が、俺の手の下で一度だけ縮んだ。

「ほら、また」

指を、その傷に近づけてみた。

触る前に、魔王の手が俺の手首を掴んだ。

昨日より速い。

「触るな」

「痛いんだろ、やっぱり」

「……いい加減にしろよ」

声が、少し乱れていた。

乱れを隠すように、魔王は俺の手を寝台に押しつけた。

この男は、傷に触られると、息が乱れる。

その乱れを、隠したいのだ。

「殺しに来たんだろう」

魔王が言った。

玉座の間で、初めに聞いた言葉だ。

だが今日は、続きがあった。

「殺しに来たんだろう。剣はそこだ」

枕元を、顎で示す。

刃は、俺の側を向いたままだ。

「取れ。今なら、傷も塞がっていない」

「……」

「なぜだ」

「三人が死ぬ」

「賢いな。昨日と同じ答えだ」

「考えるまでもないからな」

魔王が笑った。

笑いながら、俺の麻の上衣の裾を、ゆっくり捲り上げた。



「二晩目だ。今日は自分で脚を開くか」

「膝は閉じてる」

「開くまで待つと思うか」

「そんな顔をしてない」

「そうだ」

麻の上衣を、頭から抜かれた。

うつ伏せにされて、腰だけを引き上げられた。

後ろから、だ。

首の後ろの古い火傷を、熱い指がなぞって下りていく。

今日は、顔が枕に埋まる。

それが少し楽だと思った自分に、腹が立った。

「昨日のが残ってるな。もう濡れている」

「油だ」

「油はもう乾いた。これはお前のだ」

指が、ケツの穴に触れる。

昨日さんざん広げられた穴は、押されただけで開いた。

「ッ、」

「入るな、このケツは。もう俺の指を覚えている」

「勝手に、開いただけだ」

「なら、なんで締める」

指が、二本まとめて入ってくる。

魔王の太い指が、根元まで沈む。

昨日みたいに、探らない。

まっすぐ、腹側の浅いところへ来る。

前立腺だ。

「ここだろう」

「ちが」

「ここだ」

グリユ。

「ンあ、ッ」

「昨日と同じ声だ」

「言う、な」

声が、鼻から抜ける。

枕に顔を埋めても、抜ける。

埋めたぶんだけ、こもって、余計にみっともなく聞こえた。

「隠すな。聞かせろ」

「誰に」

「俺にだ。今夜は俺しかいない」

「なら、聞くな」

「塞ぐ耳がない。俺のために鳴いてるんだ」

「あんたのため、じゃない」

「なら誰のためだ」

「……知るか」

一人だと、逃げ場がない。

十二人に聞かせるほうが、まだましだった。

「もう一本だ」

「ま、って」

「待たない。昨日も言った」

指が増えて、中で開かれる。

ヌチュ。

グチュ、と鳴る。

自分の中から出る音に、まだ慣れない。

「乳首も、昨日で赤くなったな」

「触る、な」

「両方は無理だぞ。どっちがいい」

「知るか。好きにしろ」

「両方だな」

片手が前へ回って、乳首を摘まむ。

魔王の腕が、俺の胸を下から抱え込む。

「胸、ばっか、っ」

「ケツが締まる場所を探しているだけだ」

もう片方の手は、後ろで前立腺を押したままだ。

前と後ろで、別々に責められる。

「ヒ、ッ、あ、あ」

「胸で締まる。昨日も言った」

「言う、な、っ」

「同じことを何度も言うのは、お前が同じ反応をするからだ」

「乳首と、ケツと、どっちが先に音を上げるか見物だ」

「……腹立つな、あんた」

爪の先で弾かれて、潰される。

潰されるたびに、後ろの指を締める。

締めると、前立腺に指が食い込む。

逃げ場が、どこにもない。

前を締めれば後ろが、後ろを締めれば前が。

「ア、ア、そこ、両方、むり」

「無理じゃない」

「むり、だ、って」

「アッ、ンア、アッ」

声が、勝手に高くなる。

「ケツと乳首、どっちで鳴いた」

「知る、か」

「言えたら、片方はやめてやる」

「……卑怯だ」

「昨日も言われた」

「もう前が垂れている」

垂れていた。

触られてもいない前から、我慢汁が糸を引いて、寝台の敷布に落ちている。
落ちたそれが、じわりと布に染みて広がる。

染みが広がるぶんだけ、量が分かる。

一度も触られていないのに。

「見ろ、と言いたところだが、今日は誰も見ていない」

「じゃあ、いい」

「駄目だ。お前が見ろ」

赤茶の髪を掴まれて、顔を横へ向けさせられた。

敷布の上に、我慢汁が溜まって、糸を引いている。

「触ってもいないのに、これだ」

「……黙れ」

「奥だけで、こんなに濡らす男は珍しい」

「油の、残りだ」

「濡れている。指にも伝ってくる」

ケツ穴に入った指が、ぬめって鳴る。

グチュ、と。

自分の体の中が、それだけ濡れているということだ。

「十晩、これが続けたら、どうなるかな」

十晩。

その言葉で、腹の奥がまた縮んだ。

縮んだのが、指に伝わったのが分かった。

「今、締めたな。その一言で」

「腹が、勝手に動いただけだ」

「締めた」

「アッ、ヒッ、アアッ」

「十晩、耐えられると思うか」

「耐え、る」

「二晩でこれだ」

「知る、か」

「知らないなら、教えてやる」

指が抜けて、代わりにちんぽの先が当てられた。

昨日で覚えている、あの太さだ。

先が、縁に引っかかる。

「入れる」

「まだ――」

待たなかった。

ズン。

「ンあ、あああッ」

一気に、奥まで。

昨日届いた場所に、今日も届く。

人間相手には、一度も届かなかった場所だ。

「奥、来て、る」

「そうだ。ここが、お前のいちばん奥だ」

「言う、な」

「二晩目で、もう俺の形に開く」

「昨日より、ケツが柔らかい」

「布団が、あるからだ」

「石の上のほうがよかったか」

「……最悪だ」

最初から、加減がない。

後ろからだど、もっと深い。

腰を掴まれて、引き寄せられるたびに、奥を叩かれる。

ズン、ズン。

繋ぎ目から、昨日のぶんが搔き出されて、太腿に垂れる。

ズチュ。

魔王の腰が、打ちつけるたびに音を立てる。

枕が、顔の下でずれていく。

「アッ、ア、ア」

「アアッ、ンア、ッ」

「昨日より、声が早いな」

「そんなわけ、ない」

「早い。昨日は、ここまで来るのにもっとかかった」

掴まれた腰が、勝手に迎えにいく。

今日は、指摘される前に気づいた。

気づいて、止められない。

「また、腰が来ている」

「知って、る」

「知っていて、やめないのか」

「腰、が、勝手、に」

「なら、俺のせいじゃないな」

「……あんたが、悪いんだろ」

「今、腰を振ったのはお前だ」

「……………」

言ってしまった。

言った瞬間、中のちんぽが、一度大きく脈打った。

「今のは、効いたな。俺に」

「なに、が」

「腰が勝手に、と言われるのは、悪くない」

魔王の声も、少し乱れていた。

傷に触ったときと、同じ乱れ方だ。

言えば、この男が乱れる。

そう思った自分が、いちばん気持ち悪かった。

「なんで、俺は」

言いかけて、やめた。

なんで俺は、この男を乱れさせようとしているんだろうか。

「なんだ。言え」

「……なんでもない」

「言え」

「奥、擦れ、て、なんでも、なくない」

違う言葉が出た。

考えていたのは、別のことだ。

「アッ、ンア、ア」

「そうか。奥がいいか」

「いい、と、は」

「言ったも同然だ」

「ちが、う」

「違わない」

奥だけを、短く突かれる。

抜かずに、先で捏ねられる。

グリユ、グリユ。

玉座の段でされたのと、同じやり方だ。

「そこ、ばっか、やめ」

「口だけだな、それは」

「ちが、う」

「なら続ける」

「アッ、ンア、ア」

体が、それを覚えている。

覚えているから、来ると分かる。

分かるのに、逃げられない。

「アッ、ア、来る、また」

「来い」

「や、っ、アアッ」

「来い。俺の下でイけ」

いった。

ケツだけで、前は触られないまま。

腹の奥が、内側から絞られるみたいに締まって、そのまま持っていかれた。

精液が、敷布にまた飛ぶ。

垂れて、さっきの溜まりと繋がる。

「出したな」

「言う、な」

「昨日は石の上だった。今日は敷布だ。見れば分かる」

いったばかりで、中がまだ震えている。

その震えを、無理やり割って、また奥へ突かれる。

「ま、って、いま、いった」

「知っている」

「無理、っ、いま、無理」

「無理じゃない。まだ俺が出していない」

それを言われて、逃げ場が完全になくなった。

この男が出すまで、終わらない。

昨日、それを体で覚えた。

「出す、なら、はやく」

「催促か」

「ちが、う」

「催促だ。言質だぞ、それは」

言質。

昨日、俺がこの男の言葉を証拠に使った。

今日は、逆にやられている。

「言って、ない」

「はやく出せ、と口が動いた」

「言って、な——アッ」

最奥を、強く突かれた。

それきり、言い返せなくなった。

ズン。

ズン。

腹の底が、この男でいっぱいになっていく。

「奥、が、押し上げ、られ、て」

「三晩ぶんが行き場を失っているだけだ。まだ足す」

「出すぞ」

「——」

待たなかった。

ドク。

ドク、ドク。

最奥で、弾ける。

「シア、アッ、あ」

精液が、いちばん奥に、また溜まっていく。

まだ乾いていない昨日のぶんの上に、重なる。

「多、い、っ」

「二晩ぶんだからな」

「そんな、わけ」

「昨日も出した。今日も出した。腹が覚える」

「腹に、聞くな」

「覚える」

下ろされて、敷布に頬をつけた。

腹が、昨日より重い。

後ろから、まだ抜かない。

「抜かないのか」

「朝までに、もう一度入れる」

「……夜が明けるまでか」

「二晩目は、そういう約束だ」

「誰と、した」

「たったいま、俺が決めた」

「そんな約束、聞いてない」

「決めた。昨日もそうした」

昨日と、同じやり口だった。



少しだけ眠ったらしい。

目を覚ましたら、まだ繋がったままだった。

「起きたな」

「……いつから」

「お前が寝てからも、入れていた」

「……ずっとだったのか」

「動かしてはいない。入れていただけだ」

「たちが、悪い」

「褒め言葉だな」

「ちがう」

それでも、眠るあいだずっとこの男の形に開かされていたのだ。

「離せ」

「朝までに、もう一度だと言った」

体を返された。

今度は、正面からだ。

金色の目が、真上から俺を見ている。

頭ひとつぶんの差が、そのまま上から降りてくる。

「顔が見えるな、この向きは」

「灯りを消せ」

「見る。俺のものの顔だ」

「ちがう」

「昨日から、同じことを言っているな、お前は」

「あんたの口も、ずっと動きっぱなしだ」

「そうだな」

片脚を、肩に担がれた。

魔王の肩は、俺の腿より厚い。

「担ぐな」

「肩に乗せたほうが、奥まで入る」

「深、い、って」

繋ぎ目が、さっきより深く見えるようになる。

目を開けたまま、そこがどうなっているか、見えてしまう。

「見えるだろう。俺が、お前のどこに入っているか」

「まぶたは下ろしてる」

「目を開けろ」

「いやだ」

まぶたが、震える。

「開けろ」

開けてしまった。

命令されて、開けたのではない。

見たかったのだと思う。

それが、いちばん認めたくないことだった。

「入ってるな、根元まで」

「……黙れ」

「言わせたのはお前だ。目を開けた」

「まぶたを上げろと命じたのは、あんただ」

「口はな。動いたのはお前の目だ」

言い返せなかった。

ズン。

魔王の分厚い胸が、俺の胸を押し潰す。

正面からだど、奥の当たり方が変わる。

さっきと、別の場所に来る。

「ヒッ、あ、そこ、さっきと、ちがう」

「アアッ、ンア、ッ」

「向きが変わったからな。両方、覚えろ」

「両方、は」

「昨日は諸侯の前で、さっきは後ろから、今は正面だ。三晩ぶん、一晩でやっている」

「うるさい」

「順に入れているだけだ。どの向きでも鳴くようにしてやる」

「同じ、だろ」

「違う。全部、覚えさせている」

奥を、突かれた。

声が、出なかった。

ズン、ズン。

担がれた脚が、揺すられるたびに跳ねる。

兵として十年、鍛えた脚だ。

その脚が、魔族の肩の上で、勝手に跳ねている。

「その脚で、俺の腹を蹴ってみろ」

「……腕が、動かない」

「脚だと言った」

「知るか」

「脚が、逃げようとしてるな」

「勝手に、跳ねてるだけだ」

「逃げて、追いつかれている。昨日と同じだ」

「アッ、ンァ、ア」

「昨日と、同じ声だ」

「ちが、う」

「同じだ。俺が覚えている」

腰を掴み直された。

魔王の太い指が、腰骨の痕を覆って余る。

「ちんぽ、が、腹、突いて、る」

「腹の皮の内側まで届いている。手を当てれば、最奥の形が分かるぞ」

親指が、昨日つけた痕の上に、また食い込む。

「アッ、ア、また、そこ」

「奥が好きだな、お前は」

「そこ、ばっか、言うな」

「なら、なんで締める」

「ちが、っ、アッ」

「締めた。今も締めている」

「ンア、ア、うるさ、い」

「うるさくても、締める」

締めていた。

突かれるたびに、締めて、締めたぶんだけ奥に当たって、また締める。

腰を掴んでいた片手が離れて、赤いままの乳首を潰した。

潰されるたびに、後ろがひとりでに締まる。

「ヒッ、ア、むね、は」

「後ろだけで足りると思うな」

「アッ、アアッ、両方、っ」

爪の先が、また弾く。

「潰されながら締まるのが、お前の体だ」

「乳首、と、奥、が、いっしょに——」

「亀頭の段が、褌をめくったままだ」

前は、もうずっと垂れている。

二度、出したのに、まだ垂れる。

「また来そうだな」

「こな、い」

「来る。腹が、もう波打っている」

腹の内側が、勝手にうねっているのが、分かる。

この男の形を、覚え始めている。

昨日の今日で、もう。

「アッ、ア、ア、来る、来る」

「シア、アアッ、ヒッ」

「来い、エルド。正面で、俺を見ながらイけ」

「見ない」

「見ろ」

「いや、だ」

「見ろ、と言った」

見た。

金色の中に、俺の緑が映っている。

その目を見たまま、いった。

前からも、後ろからも、正面からも、この男に持っていかれた。前から垂れたぶんが、腹の上で糸を引いている。

「見ながら、いったな」

「……」

「答えないのか」

喉が、鳴る。

「……見て、ない」

「嘘だ。目が合っていた」

「暗くて、見えなかった」

「合っていた。逸らさなかったのは、お前だ」

いったばかりの中を、また突かれる。

この男が出すまで終わらないと、体が覚えている。

「アッ、ンア、まだ、イって、る」

「知っている」

「無理、っ、いま、無理」

「無理じゃない」

「出す、なら」

「また催促か」

腰が、逃げる。

「ちが」

「催促だ。さっきもした。明日も言うんだろう」

「明日は、黙って、る」

「その口が、先に動く」

ズン。

グチュン。

最奥で、また弾けた。

ドク。

ドク、ドク。

精液が、また奥に注がれる。

昨日からのぶんの上に、重なっていく。

「アッ、あ、あ、多い」

「三晩ぶんだと言った」

「一晩、なのに」

「腹は、覚えている」

「腹が、重い」

「二晩でそれだ。十晩目にどうなるか、楽しみにしている」

「……趣味が悪い」

「知っている」

ようやく、抜かれた。

抜けたあとの繋ぎ目から、溜まった精液が押し出される。

ドブ。

太腿を伝って、敷布まで下りていく。

垂れて、溜まって、糸を引く。

その量を、俺は見なかった。

湯桶は、枕元に置かれたままだ。

一度も、手をつけていない。

「腹が張っているな」

「言う、な」

「押すと分かる」

「手、を、退け、ろ」

「明日も、この部屋か」

「湯殿だ」

「……なんで」

腹の底が、まだ重い。

「腹に入れたまま寝かせる。明日、湯の中で掻き出す」

「湯なら一人で浴びる」

熱い掌が、俺の張った腹を押した。

「湯殿の扉は、閉まらん」

「……行かない」

魔王の指が、傷をなぞる。

「来る」

魔王は、それきり手を止めた。

止めて、俺の隣に、また背中を向けて横になった。

広い背中だ。

黒い角が、枕の上で後ろへ倒れている。

腹の傷は、こっち側にはない。

向こう側だ。

だから、この男は傷のある側を、俺に見せない。

——昨日、あんなに見せたくせに。

諸侯には見せて、俺には隠す。

どういう順番だ、それは。

剣は、まだ枕元にある。

刃は、俺の側を向いている。

——剣は、そこにある。

俺は、その柄に手を伸ばした。

握った。

剣だこの上に、また柄が食い込む。

握って、背中に落とすかわりに、俺は、刃の向きを直した。

切先が、自分の喉のほうへまっすぐ来るように。

誰も見ていない。

それでも、直した。

勇者だったところからの、癖だ。

魔王の背中では、動かない。

息だけが、ゆっくり上下している。

傷に触られていないから、乱れていないのだ。

腹の奥は、まだ熱い。

明日も呼ぶと、この男は言った。

行かない、と俺は言った。

来る、とこの男は言った。

たぶん、来るんだろう。

テオ。

このままだと俺は、明日も自分から脚を開く。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。